
救世主は異世界人!?

万華鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救世主は異世界人!?

【Nコード】

N5356Y

【作者名】

万華鏡

【あらすじ】

——気づいたらそこは、私の知らない世界だった——
そこに存在する2つの力
・・・魔法と技術。クォーツとフロー・・・。

繰り広げられる戦争
安全を求めて逃げる人々
絶対に入ってはいけない場所

なぜここにいるのか。ここに迷い込んだのに、何の意味があるのか・
・・。

何故か異世界トリップしてしまった主人公が、異世界で勇ましく生きていく話です・・・多分!!

登場人物等（前書き）

ばりばりネタバレあります！！嫌な人は次から読んでいってください。

登場人物等

（主要人物）

○天神天満あまがみてんま

18歳・女 一人称…私

黒髪に黒い瞳。

ちよっと癖があるがサラサラの髪。

結構思ったことはズバツと言ってしまう。

人付き合いは得意で、友達も多いが、自分が現在生きていることに
ついて、意味が見いだせない。

嘘をつくのが下手。

霊的なものが苦手。

トリップ後は、聖なる泉によって闇の力を手に入れる。

男口調。

○潤爽魔うるもつそうま

18歳・男 一人称…俺

黒髪に黒い瞳。

少し長めの短髪。

天満の同級生で、幼馴染。

天満とは家族みたいな関係だが、実は好き。

基本騒がしいけど、意外と真面目。

天満とともにトリップしてしまった。

めっちゃポジティブ。

トリップ後は、銀によって光の魔法を使えるようになる。

○暁紅 あかつぎ

25歳・男 一人称…おれ

赤髪に赤い瞳。

クオーツの王。

女性至上主義で、女の人には優しい。

ある程度までは紳士。

炎の魔法を使う。

○漣銀 なみぎん

23歳・男 一人称…オレ

銀髪に銀の瞳。

フロアの王。

光の魔法を使えるが滅多に使わず、常に愛用の銃を持ち歩いている。

爽魔曰く『人をいじめて楽しむ変態』。

○光夜 ひかりや

年齢不明・男 一人称…わたし

黒髪黒目で常にどこか光を帯びている。

長い髪は後ろの方だけひとつに結んで、前のほうに流している。

「聖なる泉」にて、天満の守護精霊になる。

闇の精霊で、闇の精霊たちを統べていてなかなか偉い立場にいる。

自分勝手に自己中心的。

中性的な顔立ち。

くサブキャラ等く

○明里 あかり

16歳

金茶の髪にオレンジの瞳。

無属性の魔術師。

普段の口調は落ち着いている。

素直で純粋な癒し系。

背が小さいのがコンプレックス。

○桂城美沙 かつらぎ みさ

25歳

金髪に青の瞳。

クォーツの女騎士で、軍部団長。

気前のいい姉御肌。

背が高い。

くその他設定く

○神秘の森 しんぴのもり

精霊がとても多く住んでいる広大な森。

一度はいったら二度と出られないといわれている。

別名『迷いの森』

○聖なる泉 せいなるいずみ

神秘の森の奥深くにあると言われている湖のこと。

とても澄んでいてきれい。

精霊によって、とても大きな力が宿っている。

第一話 救世主にはなれません。

少し薄暗い廊下を歩いていく2人。周りに人はいない。

「悪いな。突き合わせちまって。」

「まったくだ。」

「うわっ！ ひっでえー！！」

こんにちはー私は天神天満。あまがみてんまで、隣にいる私と同じく黒髪黒目の彼の名は、潤爽魔うるそうまと言って、あたしの幼馴染。今私たちがいるここは、今はもう誰にも使われていないという裏校舎。なぜ私たちがここにいるのかというと、爽魔が学級委員なので先生にこの裏校舎にあるらしい授業で使う資料等を持ってきてほしいからだそうだ。ちなみに、「怖いからあそこには入りたくない」という先生の我儘のせいでもある。おいしっかりしろ教師生徒の敵！！

・・・そう、ここ裏校舎には幽霊が出るという噂がある。

・・・・・・

ばかばかしい・・・とは思いつつも、私はこういう話は苦手だ。誰にもいうんじゃねえぞ。恥ずかしいからなっ！ま、今のところ爽魔にすらこのことはばれていないから・・・大丈夫、うん。だからもうこの話は打ち切りな。はい、しゅーりょー。

はい、話がそれましたーもとに戻しまーす。

つまり、その資料だか何だかを取りに行かされるのに、ほぼ無理やりこの爽魔に手伝わされることになった……。性格はまあ置いて、顔はいいんだから手伝ってくれる女子なんてそこらじゅうにいるでしょうに。……。いや、それ以前に男子に手伝わせろよって話だよな……。。

と、いうことで現状報告おわり！。

まあ、そういうことで、しばらく歩いていると……。

なんかが聞こえた……。。

「！！！！……そ、そそ爽魔……今、なんか言った？」

「？いや、何にも言ってるけど……。！！？」

爽魔も気づいたみたいだ誰かの話声……。

……。。

こんな誰も来ないような裏校舎に……。話声……。？

「おーい、誰かいるのかー？」

そう爽魔が言うと、その話声はぴたりと止まった。

……。。

しゅん・・・・・・・・・・がたっ！。

そそそそそ爽魔あああっ！！

なんかいま、今！がたっって言っただがたっってえええ！！まさか本当に幽れ・・・・・・・・いやいやいや、この話はやめておこう。

これは幻聴だ。

・・・とりあえずもうこんなところ早く出よう！嫌な予感しかしないっ！！そう思って回れ右をすると、突然爽魔に腕をつかまれた。

「何してんだ。早くいくぞ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・え？マジすか爽魔君。君
正気？

「ななな何言っただ爽魔！落ち着け、考え直せ！！幽れ・・・・・・・・・・だ、誰かの密談とかだったらどうするんだ！！！」

「お前が落ち着け。」

おおお前が落ち着きすぎなんだよおおおー！！なんだその「面

白そー」って顔！そうだったこいつホラーとか大好きなうえに、どうしようもないポジティブ野郎だったっ！もし、もし本当に幽霊とか出てきても平気な顔して「こんにちはー」とか言えるような奴だった！！！そんなことを考えていると、ふと爽魔がこっちを振り返り、にやりと笑った。

「なに、お前。もしかして怖えのか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

「ななな何言ってやがんだてめえええ！！こんなもん怖くとも何ともないっ！むっむしろ好きだ！」

何言ってやがんだ私の口。全くと言っていいほど好きじゃねえよ！

「じゃあ、入ってもいいよな？声の発信源この図書室みてえだけど。」

「・・・・・・・・。」

いやはや、いつの間に・・・なんて早業なんだ爽魔よ。よし、ここは爽魔が図書室に入った途端ドアを閉めて全力ダッシュで逃げよう。

「分かった。分かったからまずその不躰な腕を離そうね爽魔君。」

じゃないと逃げれるもんも逃げれなくなるじゃねえか！

「無理。逃げるから。」

「な、な何言ってんだ！逃げっ逃げねえよっ！！」

「いや、逃げる気満々だろ。その体制。」
「……………」

いつの間にか私の体は、図書室とは反対の方向を向いていた。あまりの恐怖と焦りに、思っていることと行動が直結してしまっている様子だ。ふざけんな私の身体。しっかりしろ。

「ほら、早く入るぞ。」

「……………」
「あーもう！分かったよ。入ればいいんだろっ！！」

こうなったら、とつと何にもいないということを爽魔にわからせて、早いところを出ようじゃないか！そうして、爽魔はすたすたと、あたしは恐る恐る入って行った。

「な……なんかいたか？なんもないだろう、いないな。よし、こんなところもうでよう。」

「早っ！……ったく。……？……なあ天満。あれ、なんだと思う？」

「なっなんだ！？なんかいたのか！？」

「いや違いから。あれ。」

そういつて爽魔はある場所……というか、一つの本を指差した。そこには、この古びた図書室にはいかんせん不釣り合いなほどきれいで存在感のある本だった。爽魔は、その本を手を取った。

「すげえ……綺麗だな……………」

「ああ……………」
「そうだな……………」

金と銀の色で施されたんだか妖しく輝く本。とてもきれいで、思わず見入ってしまうほど。だが待て。……とつても嫌な予感する

んだけど。え、なにこれ？普通こんな古びたところにこんなに綺麗なもんあるか？・・・・・・埃一つ無いんですけど。いやな結論に行きつき、顔を引き攣らせながらじりっと一歩後ろに下がった時、
爽魔^{あくま}が何かを言った。

「・・・開けてみよっかな・・・・・・。」

「えええ！？あ、開けんのか？こんな妖しい本を？」

「いいだろ別に。何かが出てくるわけでもねえし。」

「・・・・・・。」

なんか出てきたらどうするんだよ・・・・・・い、いや・・・・・・出てくるわけねえか、うん絶対ない。

「じゃ、開けるぞ。」

「お、おう・・・・・・。」

そして爽魔はその本を開けた。

その瞬間・・・・・・光が弾けた。

「「！？」」

そしてそのまま、私は気を失った。

「――――！――――しろ――――」

ぼそぼそと、人の話す声が聞こえる。どこだろうここは・・・洞窟か？あれ・・・私何してたんだっけ・・・たしか 爽魔と一緒にいて図書室で本を・・・。

・・・本を？

私はがバツと起き上った。腰が痛い。なぜにこんな固い石の上で寝転がっているんだ私。意味が分からないぞ。

というか爽魔ああああっ！！全然大丈夫じゃなかったじゃいかああ！！

私は首が取れそうなほどの勢いであたりを見回す。そしてあることに気が付く。近くに爽魔はいなかった。その代りに見ず知らずの人たちが、私を囲むようにして立っていた。え・・・何。この状況？私、今どうなってんの？っっかどこだよここ・・・？

「――の、あの！！」

「うおわああ！！？」

「きやああっ！？」

え、なに突然？というか誰だこの子・・・？

「・・・」

な、なんかさっき無駄に変な声出してしまったせいで変な沈黙流れてんですけど。え？何これ。これ、私が話しかけた方がいいのか？

そうなのか？

「え．．．．．っと．．．．．ご、ごめんなさい？」

「え？ い．．．いえ。こちらこそ．．．？」

わけもわからず、とりあえず謝っておいて少女を見上げた。金茶の髪と、オレンジの瞳．．．．．？私の目の前にいたのは、まだ年端もいかぬかわいらしい少女だった。

「ところで、ここはどこなんですか？」

このままじゃ埒が明かないと、私は本題に入ることにした。幽霊関係以外なら意外と動揺もしない私。世の中不思議だよなあ。

「あ、はい。ここはクォーツ国の村はずれです。」

って、いやそんな国聞いたことすらねえよ！！．．．と、叫んでは目の前のこの少女がかわいそうなので、私は努めて冷静に言葉を返すことにした。これで泣かれちゃあどうすればいいかわかんなくなるしな。

「はあ．．．く、くおーつつてなんですか？」

く．．．くおーつつて言いにくいな．．．．．あ、あれ？でも言葉が通じるのに外国なのか？

「え？．．．えっと、クォーツというのは、この大陸全土のことです。」

.....。

・・・やめておこう。なんだかこのことについてはこれ以上聞いた
ら頭がパンクしそう。だいたい予想できていたと思うが私は頭がめ
ちゃくちゃ弱いからさ。

「君の名前はなんですか？」

「あかり明里です。えと・・・あなたは？」

おおーと、名前を尋ねるときはまず自分から、だったな。忘れてた。

「私は天神天満。」

あたしがそう答えると、明里ちゃんは笑顔になった。

「さすがお偉い方なんですネ！！天満様っ！！」

うん、わけがわからない。お偉い方って・・・え、なに？私ってお
偉いさん設定なのか？いやいやいや、それより天満“様”って・・・
。なんか恥ずかしいぞ、オイ・・・。

「では本題に移らせていただきますね、天満様。私たちの・・・

救世主になってください」

・・・・・・・・・・・・はい？

「・・・きゆうせいしゅ？」

そう問い返したら、満面の笑顔で答えられた。

「はい。天神天満様。あなたは私たちの救世主です。」

「い、いやいやいやい！！人違いっすよ！私が救世主う！？はっ、ありえねえ！！」

「いや・・・ですが。」

私の頭の中は混乱していた。そりゃあ初対面の人たちの前で大声で叫んでしまうほどに。そんな時、一人の老人が私の目の前に立った。
な・・・なんだ？

「長老様・・・！？なぜここに・・・。」

長老様・・・・・・・・？そう呼ばれた老人は、一言でいうととてもなぐ怪しい。絵本に出てきそうな杖と黒の所謂魔女みたいな衣装を着ていた。・・・まあ、明里ちゃんも似たようなもんだけど。ほら、顔がかわいいから怪しさが半減していた。いいことだと思うぞこれは。

「こんな大事な時に儂ひとり休んでいることなどできぬのでな。明里、ご苦労だった・・・お前はもう休んでもよいぞ。」

「いえ・・・私もここにいさせてください。・・・長老様。この方は天神天満様。・・・私たちの救世主様です。」

「そうか・・・。」

「・・・・・・・・・・会話に入る余地がねええ！！っつか救世主になるなんざ一言も言ってねえしっ！！なんかだんだん腹が立ってき

た。

「ふざけんなよ・・・。」

気が付いたら声に出してしまっていた。

「え・・・？」

近くにいた人たちも私の声が聞こえたらしい。長老様に向かってなんてことを・・・！

なんて声が聞こえてくる。だが、その長老様とやらはのんきに、

「ふむ・・・。」

とだけ言っ言葉切った。

・・・なんなんだ。

・・・・・・・・・・。

え・・・なにこれ。怒ってくんないかな。その方がやりやすいし。なんて自分勝手なことを考えてしまいうくらいゆっくりした動作で私に近づいてくる。

「そなた・・・天満といったか。天満殿は何処から来られたのだ・・・？」

「え？どこって・・・そりゃあ日本からだけど。」

私が正直にそう告げると、ほとんどの周りの人たちは首をかしげた。
??????????

この場がはてなで埋まった。なんだこの不思議な空気。・・・そうか私が悪いのか？そうなんだな。そういいたいんだな。なんだか泣きたくなってきた。

が。

こんなところで泣くなんざ私のプライドが許さねえ！！

・・・と、言うことで。

私は私が持っているすべての知識で、必死に日本とは何かを説明してやった。必死に。・・・かなり痛い人に見えたことだろう。

「ふむ・・・どうやら天満殿はここではない世界からいらしたようだよ。」

あれから十分くらいたって、漸く（長老だけは）分かってくれたっぽい。いや、かくいう私も本当に異世界かは分からないんだけども。そういうことにしておかないと辻褄が合わない……。からまあそうなんだろう、と思うことにした。ただ、それ以外の人たちは納得しきれていないようだ。

「あの、長老様……。ここではない世界というのは……。？」

代表して、明里ちゃんが訪ねた。以外にしっかりしている子だ。

「はっきり言うと、異世界ということだな。」

「ですが……。そんなことが起こりうるのですか？」

「実際今起こっているだろう。こんなケースは初めてだが……。」

そういつて長老は私のほうを見た。それにならって、明里ちゃんたちも私の方へと視線をよこした。うん。なんかこんな視線にももうすでに慣れつつあるぞ。

「天満殿。話がそれてしまったな。すまない……。そなたにとっては関係のないことなのかもしれないが、この世界はこのままではやがて滅びてしまうかもしれないのだ……。儂らに、そなたの持つ力を貸してはくれないだろうか？」

……。力って言われてもなあ……。私にはそんな力ねえし……。

「うん。無理。」

私は10秒もしないうちに答えた。だって無理なもんは無理だろ。

「私には力なんてひとかけらもない。よって、ここに呼び出されたのはなにかの間違いだ。」

だってそうだろ。普通に考えてもこんなことありえねえし。

「・・・っお願いします天満様！私たちの望みはもうあなたしかいないんです！！」

明里ちゃんが今にも泣き出しそうな顔で必死に何かを訴えてくる。

うつ・・・。。。

なんだかすっごい悪いことしてる気分だ・・・。だが・・・。だけど！へんに期待させるより、ここははっきりと断っておいた方がいいと私のこれまでの経験が物語っているんだ！！だからこれだけは譲れない・・・！！

私はなるべく笑顔で、無理だということを諭そうと頑張る。

「ごめんね、明里ちゃん。でも、私には本当に何の力もないんだ。だから私が協力してやれることなんて何にもね・・・ない。」

うーん・・・やっぱ何にもねえはないよな。ここは慎重に言葉を選んでいかなければ・・・。私はまず、明里ちゃんに納得してもらえよう頑張った。・・・あれ？なんか私頑張っただけじゃね？なんて疑問は今更持たないさ！！それから何分かした後。

「・・・。。。。本当に、駄目・・・なんですか・・・？」

「うん。ごめん。私には何にもできないから。」

頑張った甲斐あってか、何とか明里ちゃんは理解してくれたようだ。

……だが。

「何を言ってるんだ！！お前救世主なんだろう！？何とかしろよっ！！」

「そ、そうだ！そんなの無責任だろ！！」

……周りの人たちはわかってくれそうにない。どうしよう。無責任なのはお前らだろ、と言いたくなかったが、むやみに争ったりしたくはないので私は必死に殴りかかりたくなる衝動を抑えていた。……しかし、本当に自分勝手な奴らだな……イライラしてくる。

「……やめんか。それはお前たちが決めることではない。」

それを言ったのは、もちろん私ではなくて、長老だった。長老……あんたいい奴だったんだな……！！地味に感動したぞ。

「天満殿。勝手なことばかりしてすまぬな。」

「いんや。私は別に……あ。」

「？」

……そういえば私、大切なこと忘れてないか？

「えっと……魔術でここに来たってことは、また魔術で帰れるのか……？」

そう、帰り道。さっきは多分あのきれいで奇妙な本を開いた途端こっちの世界に来た・・・っぽいけど、今私の手元にあの本はない。・・・もともと、あの時本を開いたのも爽魔だしな・・・この疑問については、明里ちゃんが答えてくれた。

「・・・すみません。その方法はないんです。こんなケースは今までなかったですから・・・。」

ああ・・・やっぱり？まあなんとなく嫌な予感はあるけど・・・ま、こんなことを考えてても何も始まらねえよな！！こんな時は、とにかく行動あるのみ・・・！！

「そう。素直に教えてくれてありがとう。これからもまっすぐに育つんだよ。じゃあ、私はこれで。」

「えっ。ど・・・どこに行かれるんですか・・・？」

思いついたら即行動。と、思いさっそくここから出ていこうとしたら、先ほどの言葉とともに明里ちゃんに止められた。

「あー・・・さっきも言ったように、私はここにいても何にもできないから。帰れる方法を探しに旅に出ることにするさ。」

・・・うわっ！！なんか今の発言痛い人みたいだ！チュウニビョウ？・・・本気で言ったんだけどな。

「じゃ、私はこれで！！」

と早口に言い切り、また何か言われる前にと足早にこの場を去った。途中で何人か追いかえてきたんだが、どんどん距離は開いていくばかり。ハハハ。私はこれでも運動神経は良いんだぞ。参ったか・・・

・それにしてもここ。本当に何にもねえな。隠れられるところが無えじゃねえかつ！と、そう思い走り続けていたところで、前方に森らしきところがあったので、そこに隠れることにした。

「はあっ……はああゝ」

さ、さすがに疲れたな……。だいたいもうここまで来ねえだろというところで、歩くことにした。……それにしても、この森なんか不気味だな……。

「………んん？」

おかしいな……。私はあの後、とりあえずこの森の中を歩いてみることにした。もしかしたら何かあるかもしれない、と思って。迷子にならないように目印までつけて。なのに、何にもないなと思って引き返そうとしたら……。……目印がありませんでした。

いやいやいや！！

ちゃんと消えないような目印だからな？パンとかじゃねえからな？……ま、ということで私は今迷子(?) になっているところデス……。

「はあ……。さっきより疲れる……。」

もうすでに何十分も歩き回っている私はもう限界だ……。

と、言うことで。

ちよっと休憩しよう。と、思って休憩していたら……。ん？……

なんか・・・声がするな・・・。

『こっち』

『こっちへ来て』

・・・こっちってどっちだよ。

『早く』

うるっせえな・・・。

『こっちn「だああー！！うるせえってのっ！！！」」

せっかく気持ちよく眠ってたのによお！！私はガバツと起きて、その声の正体を睨みつけようと・・・した。

『いらっしゃい』

でも、その声の主は見当たらない。

・・・声は聞こえるけど。

まままさかつ・・・ゆっ幽霊・・・!?

「つて。あ、あれ・・・?」

何処だここ。私の目の前に広がる湖。透明できれいで、そこが透けて見える。どこか幻想的な・・・見る人を魅了するような・・・。さっきの恐怖心すら忘れて、ぼーっとその湖を見ていたとき。

「・・・・・・・・っ!!?」

突然、その湖が光りだした。

『そなたの名は何だ?』

「!?!」

さっきみたいに、頭の中に直接響いてくるような声。だが、その声の主は確かに私の目の前にいた。

え・・・え? な、なななんか・・・光ってるんですけど・・・。
・。というか湖、黒いんですけど・・・!?

・・・・・・・・。。

『・・・？名は「ゆ・・・」

『・・・ゆ・・・？』

ゆゆ、幽・・・霊？

「ぎゃっ・・・ぎゃあああああ！！！！！！」

『！？・・・お、おい待て！！』

うん。逃げたよ。逃げたさ逃げたともさ！！ていうかなんだあれ。
なんだあれ！？絶対、人間じゃねえだろあれ！！

「！？・・・え、えええええ！？」

え？なんで叫んだかって？だって、だってよお・・・。

『なぜいきなり走り出したのだ？』

・・・なんか、またさっきと同じ所にいたから。

『そなた、わたしと契約せよ。』

「・・・・・・」

『聞いているのか・・・？』

と、言っているのは黒目で長い黒髪を後ろの方だけ結んでいて、さらに何故か発光している男だか女だかわかない多分男だろうけど

中性的な顔立ちの・・・なんか。というかさつきからこの・・・人（？）何言ってるの一人で。え、これ私に向かって話しかけてんのか？少しでも冷静になった私は、目の前にいるなんかに向かって話しかけてみた。

「えーっと・・・ところであんた何っすか・・・？」

『わたしは闇の精霊を統べるものだ。そなた名はなんという？』

「はあ・・・私は天神天満・・・です。」

『ほう・・・。』

名前を名乗ったら、なんかは微妙に口元をゆるめて目を細めた。あれ・・・これ名前言っちゃいけなかったパターン？

『では天満。わたしと契約を。』

えええ！？なんであれからこんな話になったんだ！？駄目だこいつ・・・なんかこいつのペースについていけない自信がない・・・。

「というか契約って何だ・・・？」

『・・・知らぬのか？』

「ああ。」

『・・・そうか。契約というのは、まあ簡単に言ってしまうと誓いのようなものだな。』

「誓い・・・？」

『そう。契約を交わせばわたしはいつ、どんな時でもそなたの力になると誓おう。』

・・・なんかよくわかんないんだけど、悪い話じゃない・・・のか？でも私特別な力とか全くねえんだけど・・・しかも、こいつさっきの会話からしてそこそこ偉い奴ってことだよな・・・〔闇の精霊

を統べるもの」って……。

………ん？ 闇？

「ああああの、闇って……。」

『では、さっそく契約を交わそうではないか。』

「って無視かよっ！！！」

『……はあ、天満。何故そなたはそこまで無知なのだ。……まあいい。教えておいてやろう。』

………殺意が湧いた。もうこいつ敬語とかいらねえよな。

『まず、そなたの内には今まで見たことがないくらいの強大な闇の魔力が流れておる。だがそなたの魔力はとてつもなく清らかで、少しの穢れもない。わたしはそのそなたの力に惹かれたのだ。最近はずう属性同士の契約も増えておるそうだが……本来、契約とは同じ属性同士で行うもの。故に、強大な闇の魔力を持つわたしとそなたなら、相性は抜群であろう。』

………説明長っ！！んゝっと、つまり……。

「私は、闇の魔力の持ち主ってことか？ だけど、私はもともとこの世界の人間じゃねえんだ。その世界では魔力なんてものねえし……。そもそも、なんであんたは私の魔力が闇だって思うんだ？」

『そなたの魔力が分かったのはこの湖のおかげだ。この湖は“聖なる泉”と言って、自分と同じ属性の魔力を持つものを呼び寄せることができるのだ。』

「それってつまり、あんたが私をここまで呼び寄せたから、私はいつの間にか自分の意志とは無関係にここにいたってわけか？」

『うむ。わたし程の魔力を持つものならそんなこと容易くできるか

らな。』

・・・私が無意識に立ち上がって、眠りながらここまで来てたってことか？

・・・怖っ！！！！

想像するとなんか寒気がしてきたのでやめた。私の属性が〔闇〕だってのは正直微妙な気持ちになるんだが・・・ほら、なんか闇って悪者みてえだし？・・・まあ、どっちみちこの先一人じゃどうしようもないこととかたくさん出てくるだろうし、こいつも一応悪い奴ではなさそうだし・・・。

「・・・わかった。・・・あーいや。まだ分かんねえことはたくさんあるんだが、それは後に回すとして・・・。私、あんたと契約することにしたよ。」

『・・・そうか。ならばまず、わたしの名を決めよ。』

「え？あんた名前ないのか？」

『いや・・・契約というものはそういうものなのだ。わたしの真名は別にある。』

「そうか・・・。」

名前・・・名前なあ・・・。うーん・・・。さっきの明里ちゃんといい、ここの人たちは何故かちゃんと日本語だし、名前も日本っぽいし・・・。そういうのでいいのか・・・？

「じゃあ・・・光夜ひかりやでどうだ？光る夜で光夜。」

『ふむ。分かった。では今からわたしの名前は光夜だ。』

そういった光夜はどこからか小さいナイフを取り出し、私に手を差し出すように言った。

「・・・？どうすんだ？」

『互いの指を少し切って、その切り口同士を合わせる。それで契約は終わりだ。簡単であろう？傷口はすぐに治るから心配いらぬぞ。』
「へえ〜。」

そういいながら光夜は、私の人差し指を少しだけ切って、自分も同じところを切った。不思議なことに、痛みは全くない。

『さあ。手を・・・。』

「ああ。・・・っ!？」

そして次にその傷口同士を合わせると、突然私たちの周りが光り輝いた。それは暗く、黒い・・・光。しばらくしてその光はスーッと空へと消えていった。そうして見えてきた光夜は、さっきみたいに体に不思議な光を纏ってはいなかった。

「・・・何をボーっとしている？もう契約はおわったぞ。」

「ああ・・・うん。それより、さっきみたいになんかこう・・・光ってないんだな。」

「あの光は契約を交わしていない精霊が自然に纏っているだけのものだからな。契約後は自然と消えるのだ。」

「ふ〜ん・・・成程なあ。」

ごめん多分私ほとんど理解できてない。・・・ま、いろいろあったけど、とりあえず無事契約完了っ！！契約が終わった後、私と光夜は今後のことについて話し合っていた。・・・まあ、とりあ

えずまずは今日一日どうやって生き延びるかだけだな。

「ところで天満。そなた、寢床はあるのか？」

「………無え。」

というかいきなり理不尽にこの世界にトリップさせられて、その元凶たちから逃げてきたところだったんだからあるわけねえだろ。そういうと、光夜は顔をしかめた。

「……どうするのだ。」

「そんなこと言われてもなあ。光夜、あんた精霊なんだろう？ どうにかできねえのかよ。」

「野宿でいいのならば協力してやるぞ？」

「……エンリヨしときます。」

駄目だこいつは！！あてになんねえ！！こんな今にもなんか霊的なものが出てきそうな森の中で一夜を過ごせるかってんだ！！！！

「ん……ところで光夜って、どんな技とか使えるんだ？」

もしかしたらなんか役に立つものでもねえかな。

「そうだな……先ほども伝えたように、わたしの属性は闇。いろいろ使えるが……今、この場では役に立たないものばかりであろう。」

「……戦争でしか役に立たないんすかあんたは……いや、なんもできねえ私よりかはだいぶマシか……？」

「だが……とりあえずこの森の入り口ぐらいまで飛ぶことはでき

るぞ？」

「飛ぶって・・・どうやって？あんた翼でも生えんのか？」

私絶叫系とかは苦手だぞ。

「そうではない。まあ・・・所謂瞬間移動みたいなものだな。では行くぞ。」

「・・・・・・・・はあっ!？」

そうして私は有無も言えず、どこかへとばされたのであった。

「んで・・・・・・・・ここは？」

「うむ。先ほども言った通り、森の入り口だ。」

「・・・・・・・・ここが？」

「もう少し歩けば出られるはずだぞ。」

「にしてもどっちに歩けばいいんだよ・・・・。」

そういつて私は、もう一度あたりを見渡した。あの後光夜にとばされていつの間にかいた場所は、さっきまでいたところとそれほど変わってない・・・・ような気がするんだが、それは私の勘違いだと思いたい。

「・・・・・・・・向こうの方だな。行くぞ。」

「はあ!？ちよっ!!!・・・・・・・・はあったく・・・・・・・・。」

しばらく考え込んだ後、光夜は向こうの方だといひ私の腕を引っ張りながら、どんどん進んでいく。まだ一日も経ってないのに光夜はこういうやつだとわかってしまった私は、どうせ何を言っても無駄だろうと、大人しくついていくことにした。どっちにしろ光夜の方が私よりこの世界に詳しいんだから、私には何も言う資格ないだろ

うしなあ……。はあ……。いつ帰れるんだろ……………。

「何を呆けているのだ。ついたぞ。」

「あ、ああ……………」

いつの間にか現実逃避をしていた私は、光夜の声で我に返った。というかほんとについたのかよ。疑って悪かったな光夜。お前やっぱすげえよ。とかなんとか思いながら、私たちはとりあえず宿を探すことにした。とにかく私のことを知ってるやつ……。あの洞窟にいた奴らには見つからないようにしないな。何言われるか分かんねえし。そう思っていた時、いきなりどこからか声がした。

「……。御嬢さん方。何かお困りかな？」

そういつて、夕日のように真っ赤な髪と目を持つ青年は現れた。

え……………誰……………？

「えーつと……。あんた誰？」

「……。君、おれのこと知らないんだ？」

「知るも何も……。初対面だろうが。」

私がそういうと、目の前にいる赤い奴（名前しらんので）は、笑みを深めた。非常に気色悪い……。しかも美青年なのが余計にムカつくのだが。まあそこはあえてスルーしよう。私が一方的にムカついているだけだからな。だってなんか私の嫌いなオーラというか雰囲気さらしだしてるんだもん。あ、だもんとか言っちゃたよ。きも

っ!!!!それにしてもなんなんだこいつ・・・?・・・この世界で初めて見た豪華な服装に、私はこの世界でも身分の高い者だと悟る。でもそんな(多分だけど)身分の高い奴がこんな森の入り口なんかに来るか・・・?・・・やっぱ謎だ。光夜並に意味不明だ。そんなことを思っ、ふと忘れていたが隣にいた光夜の方へと視線を向けると、何やら眉間にしわを寄せて赤い奴を睨んでいた。

「光夜・・・知り合いか？」

「・・・いや。知り合いではない・・・が。」

「が？」

「・・・わたしはあやつが嫌いだ。」

「「・・・。」」

え・・・何?なんか重要なところすつ飛ばされた気がするんだけど・・・。やっぱこいつが一番意味不明だ。誰も勝てねえよ。赤い奴笑顔が引き攣ってるし。

「・・・まあ、そのことは置いて。・・・御嬢さん、名前はなんていうんだい？」

「そういうのはまず自分から名乗るものかと。」

・・・これ、ちょっと一度はいつてみたかった台詞なんだよな。ヤベッ・・・顔が言えた嬉しさににやけてくる。どうしよう。その前に私の頭大丈夫かとか言わないでくれよ。

「ああこれは失礼。おれの名前は紅。あかつきこう 紅だよ。よろしく。」

そういつて赤い奴・・・こと、暁紅はにっこりと笑って握手を求めているのか手を差し出してきた。・・・が、そこはスルー。なんせここは魔法の使える世界。握手したら爆発・・・とか勘弁願いたい。

『気持ち悪いとはなんだ。それよりも早くあやつをなんとかせぬか。』

・・・プライバシーの侵害だと思いますよこれ・・・。

「あゝもうなんかどうでもよくなってきたんで。さようなら。」

「ええっ！？ちよつと待ってよ。おれにはまだまだ聞きたいことがたくさんあるんだからさ。」

「こっちにはねえから。」

「こら。女の子が、そんな汚い言葉つかっちゃだめだよ？折角可愛いのに・・・。」

「あゝお世辞は良いんで。私が虚しくなるだけなんで。さようなら。」

「あ、待ってってば。」

「天満。何をしておる。早くいくぞ。」

「って早っ！！置いていくなよ！！！」

「あつ、ちよつ「じゃー！！！」

はははっいつまでも笑い転げている奴は放置だ放置。ざまーみる（笑）

「はあ。しょうがないな・・・。」

「―――っうわ！？んだこれえ！！！？？」

さっさと暁紅からさよならしようと思えば、私の周りに突如炎のような赤いものがふわっと渦巻いた。あ、でも熱くねえなこれ・・・とおっても大丈夫なんじゃね？

「駄目だよ。」

「っ！！？ちよっおい！！や、やめっ」

「・・・クォーツ王。天満を離せ・・・。」

「っここ此奴！！どさくさに紛れて抱き着いてきやがた！！！！あ、もちろん暁紅のほうだぞ。光夜じゃねえぞ。」

「暴れないんなら離してあげる。」

「そうやってににこと笑う暁紅。本当に。自爆してくれないかなー・・・・。」

「わ、わかった！！分かったから、離せて！！！！ま、まじで鳥肌が・・・。」

「ひどいなあ。分かったよ。はい。」

「はああ。危なかった。・・・んで、くおーつ王ってなんだ？」

「さっき光夜が言ってたよな。ん？待てよ・・・くおーつって確か、明里ちゃんか誰かも言っていたような・・・？」

「ああ。そこは聞き逃してくれなかったんだ。」

「？」

「そのままの意味だろう・・・このクォーツの王、ということだ。」

「・・・。。。。。。。」

「・・・へー王様・・・んんっ！！？」

「お、王様あ！？このへらへらした奴が！？」

「心外だなあ・・・。ま、その通りなんだけどね。」

認めやがった・・・。

「んで。その王様がこんなところに何の用なんだよ？」

私がそういうと、暁紅はその胡散臭い笑みを深めた。なんでだ気持ち悪い。

「いや、なんかこっちの方で騒ぎがあったからね。それより天満。君、おれの城に来る気はない？」

「ない。」

「生活は保障するよ？不自由もさせないつもりだし。」

「なんでそんな私にこだわるんだよ？」

「んゝ・・・敢えて言うなら、興味があるからかな。天満。君は、なかなか貴重な魔力を持っている。それをほかの奴らに悪用されるのは嫌だからね。」

・・・って言われてもなあ・・・。こいつだってあったばかりで信用なんてできねえし・・・。

「光夜・・・どうする。」

「・・・仕方あるまい。こうなったら泊まるしかないだろう。」

「そっか・・・。」

じゃあ・・・。。。。。

「分かった。泊まる。」

私と光夜は、とりあえず今晚を無事に過ごすために暁紅の城へと入って行った。すると、数えきれないほど大勢の人たちが一斉に頭を下げていく。・・・なんだこの光景は・・・。

「紅様。お帰りなさいませ。」

そうして唯一紅に声をかけたのは、他より年配の女性だ。メイド服っぽい使用人の服を着ている・・・。ああ・・・私ってば本当にトリップしちゃったんだなあ・・・。

「うん。ただいま。」

こういう礼儀だけはわきまえているらしい紅も、ちゃんと挨拶をした。・・・そして、何故かこちらに向けられる視線。

「・・・その方々はどなたですか？」

「おれの客人だよ。空いてる部屋に案内させてあげて。」

「かしこまりました。」

・・・こういう話かけずらい雰囲気って苦手なんだよな・・・。そう思い、心の中でそつとため息を吐く。私だってちゃんと常識はわきまえているんだこんなところで叫んだりなんかしたいさH A H A H A・・・はあ・・・疲れた。早く寝てえ。

「お客様。こちらでございます。」

「あ、ありがとうございます。」

「うむ。すまぬな。」

私がお礼を言うと、光夜もそれに続いた。

「・・・光夜。今度は離れんなよ。」

私がこういったのは、この城へ入ってから光夜が何度か離れそうになって大変だったから。本当にふざけんな。・・・といたいところだが、何度注意してもわかってくれないんだが。

「何のことだ？」

・・・こんな感じに。

と、言うことで。私はどこかへ行こうとする光夜を引っ張りながら、メイドさんについていった。そして、私たちがたどり着いた部屋の扉は・・・、

「うわぁ・・・こ、これは・・・」

「・・・すごいな。」

ぐらいの感想しか出てこないくらい・・・うん、すごかった。なんかこう・・・キラキラっていうかシャララーンというか・・・まあとにかくそんな洋風で豪華な感じ。こんな説明じゃわかんないと思うけど、感覚で分かってほしい。・・・そして例のごとくその部屋の中も、

「うわぁ〜これは〜」

「すごいな。」

・・・うん、こんな感じだ！あ、因みに勘違いしてもらっては困るが、私と光夜の部屋は別々だぞ。ここ重要。そこは暁紅が配慮してくれたらしい。なんだいいところもあるんじゃないか。まあこれで、何かあったらすぐに光夜を呼べるし（例外がない限りな！）、一先ず安心だ。

・・・と、いうことで。

私はメイドさんが用意してくれたどこの衣装だとしても言いたくなるようなお姫様系のドレスを何とか説得して着ずに済み、部屋の中を探索することにした。いやあ本当に広いねここ。ちよつとこういう部屋に入ってみたかった私は、内心少しだけ浮かっていた。それにしても、本当にすごいんだぜこの部屋！！

ベッドはふわっふわのふっかふか。窓から差し込む光は眩しすぎず暗すぎず、ちょうどいい感じで。タンスの中は・・・見なかったことにしよう。

まあとにかく、主にふわふわのベッドに喜んだ私は、思いっきりベッドにダイブしてそのまま寝てしまったのでした。まったく緊張感の欠片もない私。

ま、改心はしないけど。

第二話 戦争に参加したい。

それから3日経った朝。

ここの生活にもやっと慣れてきたところだ。

まずは、この3日間で分かったことなどを述べよう。

其の一。『紅はただの女たらし』

・・・いや、ただの言い過ぎかもしれないな。聞いた話によると一応すごい強大な力を持っている・・・らしい。信じられんな。

其の二。『ここクォーツには敵対している国がある』

そこはフローというらしい。クォーツとフローは二大国家と言われている、主にこの世界で“国”と呼べるのはこの二つだけ・・・らしい。覚えやすくていいけどな・・・。。ありえねえだろっ!!!

そして最後に其の三。『フローでは、最近黒髪黒目の青年が住み始めたらしい』

この世界では、何故か黒髪黒目の奴はほぼ0%と言っていていくらい珍しいと、メイドさん達から聞いた。

・・・というか情報筒抜けなんじゃないか？フロアそれで大丈夫か。大丈夫なのか。

・・・まあ、それは置いときまして。

私思うに、その青年とやらは爽魔に違いない！
きつとそうだ。タイミング的に。

というか単に私だけトリップしたとか考えたくないだけなんだけだな！！

・・・まあ、それともかく。

私の予想はあながち間違っではないと思うんだ。

いろいろと用心深い私はそのことを城の人達に話してはいないけど。

だって、それ話して『お前は敵だ！』とか言われたらいやだろ？つか困る。

と、言うことで。

私はこれから、そのことについてもいろいろ探りを入れてみようと思っっている。

ま、妥当な考えだと思うぞ。

まあそんなこんなで、これからもいろいろと情報収集頑張って行き

たいと思います!!

「あら、今日は早いのね。」

「あ、美沙さん! おはようございますっ!!」

「おはよう。・・・にしても朝から元気ね。私にもその元気を分けてもらいたいぐらいだわ。」

「いやいや。美沙さんはそのままが一番だから!」

「ふふ、ありがとう。」

んーと、まずは人物紹介。この人は、桂城^{かつらぎ}美沙^{みさ}さん。ここ、クォーツの女騎士さんで、軍部団長様。綺麗な金髪のさらさらした髪に、きりっとした青色の瞳。とても気前が良くて、おまけに背も高い! 軍部団長だけあってめっちゃ強いし、もう文句も何も出てこねえよ。もう本当にパーフェクト! 女の鏡!!

そんな完璧な美沙さんは、どこの馬の骨ともわからない私にも初めからとっても優しかった。この人の存在にどれだけ癒されたことかもはや女神だ。私のなっ!

まあ、それは置いとくしまして。私は今日から修行していきたいと思う。この世界には、資質さえあれば誰でも魔術というものが使えるらしい。何それ誰得?

いや、私得か。なんだそれ。そんなものはいらないから、早く元の世界に帰ってえよ。

「・・・あ。」

「?・・・どうしたの?」

というか、魔術さえ使えるようになれば、自分で元の世界に帰ることできるんじゃない? なんだあ、簡単なことじゃねえか!! そうと決まれば・・・、

「美沙さん、魔術教えてくださいっ!!」

「・・・ええ!?!」

あまりの突然さに、美沙さんは見事に美しく驚いたようだった。まるでどっかの美麗なイラストから飛び出てきたかのような美しさ・
・なんて言ってる場合じゃない! ここはどうにかして美沙さんを説得しないと。

「って、いきなり言われてもね。」

「お願いしますよこの通りっ!!」

そして散々説得した結果、美沙さんが少しずつなら教えてくれることになった。本当に押しに弱い人だ。私が言うのも何なんだけど、口喧嘩とかには負けそう。ま、そこも全部含めていい人なんだけどな。悪い奴に言い寄られたりしないか心配だ。つっても、美沙さん強いし戦闘になってもそこら辺の雑魚共には負けないと思うけど。

いや、そのことは置いてとりあえず今日も情報収集から始めるとするか。

???-

と言うことで、まずは情報通なメイドさん達のお茶会に参加させてもらうことにした。人付き合いだけは昔から得意なんだよな。

「え、ってことは今度戦争があるんですか!？」

「そうなのよ。まあ、戦争って言ってもそこまで過激なものではないと思うんだけどね。相手の方もなかなかしぶとくて。ずっと長引いてるのよね。」

「そんなんで、皆混乱に陥ったりしないんすか？」

「まあ、最初は皆混乱もしていたけれどもう慣れてしまったというか……。」

「……慣れって怖いっすよね。」

「ふふ。そうね。でも、わたくしたち女性陣は心だけでも強くあらなきゃ! あっ、このお菓子も美味しいから、どうぞ食べて。」

「ありがとうございますっ!」

「あなたの食べているところを見ているとなんだかこっちまで元気がもらえるわ。」

「そうっすか？」

「ええ。」

「……なんか、照れる。というか恥ずかしい。もしかして私すっごい食い意地張ってるのか? うわっ……。今度から控えよう。」

まあとりあえずあれだよな。まずなんでそんな戦争する日がわかるんだって話だよな。ほんと、なんでだろうな。誰かわかる人いたら教えてくれよ……。なんて言ったら異世界の人間だとばれちゃうかもしれないんで黙っておきマース!!

「また誘って頂戴ね。」

「もちろんすよー喜んでっ! じゃ、また!!」

まあ今のところは『若干非常識な変わった子』ぐらいにしか認識されて無いような気がするから大丈夫だろ。・・・哀しい認識だけだな。私のこのテンションが邪魔をするんだ。こんチクショウッ。

「戦争か・・・。」

戦争。メイドさんたちはそこまで過激なものではないと言っていたけど・・・いこつかな。もしかしたら万が一にも爽魔がいるかもしれない。物陰から見ているだけなら迷惑もかけずにすむよな。多分。

さすがに命は惜しいので時間をかけてたっぷり考える。これは重要な選択肢だ。進まなきゃこのままだし進んでも終わっちまうかもしれないねえし。

「うゝん・・・。」

「何か考え事？」

「ああ、ちよつとな・・・っておわっ!？」

「ちよ、その驚きようは酷くない？おれ、普通に声かけただけなんだけど。」

「わりいわりい。つい。」

「・・・全く心が籠ってないうえに棒読みなんだけど。まあ、いいや。こんなところでどうしたの？」

「ちよい聞きてえことがあってさ。」

「おれに？」

「お前に。」

私がそういうと、突然後ろから現れやがった紅は、ぱあっという効果音でもつきそうな笑顔になった。なにこいつうざす。

「何が聞きたいの？」

「んあー大したことじゃねえんだけどな・・・。」

「・・・言いにくいことかい？」

「って訳でもねえんだよな。」

「じゃあ何？」

「・・・今度、フローと戦争があるらしいじゃねえか。」

「え」

「私もそこに連れて行ってほしいんだ。頼むよ。」

「・・・駄目だよ。」

「ぜーってえ迷惑は掛けねえから!!」

「・・・どうしてそんなに行きたいの？」

「そりゃあ、ここにずっといるわけにもいかねえだろ？」

「・・・。。。。。」

そうしてしばらく紅は黙り込んでしまった。

沈黙すること数分。

「・・・はあ、しょうがないか。分かったよ。」

「え、マジっ!？」

「うん。でも、決して危険なまねはしないこと。分かった。」

「ああ、サンキューな!」

「え、ああ・・・うん。」

まさかこんなにあっさりと許可をくれるとは思わなかったから、少しだけ拍子抜けしてしまったのと同時にすっごく嬉しい思いで満たされた。今だけは本当に心から感謝した。

「じゃあこれから数日間自分を守る術や魔法くらいは覚えないとね。」

「あ。」

召喚等の術に加えて、また新たに覚えなければいけないものが増えた瞬間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5356y/>

救世主は異世界人!?

2011年12月19日16時48分発行